

To-不定詞補文 versus 動名詞補文

友繁義典

文化環境学大講座

Infinitival Complement Clauses versus Gerundive Complement Clauses

Yoshinori Tomoshige

In this paper, the semantic and functional differences between infinitive and gerundive complement clauses are considered. As is well known, some verbs are permitted to occur in both types of complement clauses, whereas other verbs are allowed to occur in one type only. This paper will discuss from a semantic point of view what kind of verbs occur in which complement clause type. Moreover, this work will discuss the nature of infinitival and gerundive complement clauses in light of the notion "the conceptual distance" advocated by Haiman (1983) and the pragmatic concept "prior intention" proposed by Searle (1983).

1. はじめに

ある動詞は、その後続要素としてto-不定詞補文のみを従え、また、別の動詞は、その後続要素として動名詞補文のみを従えることはよく知られている。例えば、次の(1)は、to-不定詞補文のみを後続要素として許す動詞のリストであり、一方、(2)は動名詞補文のみを後続要素として許す動詞のリストである。

- (1) afford, agree, aim, arrange, ask, aspire, choose, decide, demand, desire, deserve, determine, expect, hesitate, hope, be inclined, learn, long, manage, mean, offer, prepare, pretend, promise, refuse, threaten, venture, vow, want, wish, yearn, etc.
- (2) admit, appreciate, avoid, consider, contemplate, deny, dislike, endure, enjoy, escape, excuse, fancy, finish, forgive, give up, (cannot) help, imagine, keep (on), mind, miss, postpone, practice, put off, recommend', risk, cannot stand, suggest, etc.

本稿では、いかなる条件・理由である動詞はto-不定詞補文のみを許し、また別の動詞は動名詞補文のみを許すのかを若干考察することにする。

2. to-不定詞補文のtoの意味と機能

to-不定詞補文のtoに関しては、すでに Curme (1931:493) が、toは、元来、toward や in the direction of を意味していたことを指摘している。すなわち、前置詞のtoと同様に、to-不定詞補文のtoも「方向」を表すという主張である。また、Huddleston and Pullum (2002:1241) においてもCurme (1931) と同様の指摘が見られる。すなわち、彼らは、不定詞のtoは前置詞のtoから派生しており、toは、goalを表すと説明している。また、Smith and Escobedo (2001:552-3) は、前置詞のtoは、source-path-goalのイメージスキーマのpathを表すと述べている。そして、彼らは、不定詞補文のtoも、前置詞のtoと同様に、あるentityがgoalに向かって経路を進んで行くイメージを喚起すると述べている。あるentityが、経路を通して目標に向かうこのイメージから、to-不定詞補文は「未来指向性」「(未来の)可能性」「まだ実現されていない事柄」などの内容を表すとこれまで述べられてきたものと考えられる。また、あるentityが、一定方向に進んで行き目標(goal)にたどり着くことを言い表す際にもtoが用いられるが、この場合、toは「到達」の意味を表す。例えば、I wanted to talk to my mother about it. においては、to-不定詞補文が表すイベントは実現化されていないが、I managed to talk to my mother about it.では、to-不定詞補文が表すイベントは現実に実現されたものであることが表されており、前者のtoは「方向」を、後者のそれは「到達」の意味をそれぞれ表すことになる。

ところで、to-不定詞補文は、他動詞の直接目的語として機能している名詞句なのか、あるいはそうでないかを考えてみることにする。次の、Duffley (2000:229) がRosenbaum(1967:1)から引用している例を見てみよう。

- (3) a. Everyone preferred to remain silent.
b. To remain silent was preferred by everyone.
c. What everyone preferred was to remain silent.

よく知られているように、ある要素を名詞句と判定する統語テストに受動文や疑似分裂文を作ったり、問題部分を代名詞で言い表すなどの方法があるが (Duffley 2000:227、八木 2006:266)、(3b) と (3c) では、to-不定詞補文が名詞句として用いられていることが分かる。したがって、上の例では、to-不定詞補文は直接目的語である名詞句として機能していると考えられる。¹ しかしながら、次の各例を見てみよう。

- (4) a. She attempted/wanted/decided to ask a question.
b. *To ask a question was attempted/wanted/decided by her.
(5) a. Everybody wants to keep warm.
b. ?To keep warm is wanted by everybody.
(Duffley (2000:230)

上の各例では、to-不定詞補文が直接目的語である名詞句として容認されていない。Duffley (2000:231) は、(3b) や (3c) のような例が存在するので、to-不定詞補文が直接目的語になりうる可能性を完全に否定はしていないが、たいていの場合、"it acts rather as an adverbial specifier of the goal or result." であると主張している。すなわち、to-不定詞補文は、名詞句としてよりも、むしろ目標や結果を指し示す副詞的要素として機能するという主張である。実際、Duffley (2000:233) は、例えば、Martin longed to leave home. に関して、to leave homeは、Martin longed for adventure.のfor adventureと同様の機能をしていると述べている。toは、「終点へと向かう移動」を基本的に意味するとDuffleyは述べているが、この見解も、toが、source-path-goalのイメージスキーマのpathを表すとする考えと共通する。いずれにせよ、toが、あるentityがある目標に向かって移動するイメージを喚起することは確かであり、結局、「方向」と「到達」のいずれかの意味を表すということになる。

ところで、Lakoff and Johnson (1980:129) に、次のような主張がある。

- (6) If the meaning of form A affects the meaning of form B, then, the CLOSER form A is to form B, the STRONGER will be the EFFECT of the meaning of A on the meaning of B.

そして、Lakoff and Johnson (1980:130) は次のような例を挙げている。

- (7) a. I taught Greek to Harry.
b. I taught Harry Greek.

彼らの説明によると、動詞taughtが与えるHarryに対する影響力は、(7b) の文の方が強いという。すなわち、統語上、taughtとHarryが (7a) のtaughtとHarryの場合よりも近い (実際、隣り合っている) からである。したがって、Lakoff and Johnson (1980:130) の言葉を借りると、"there is more of a suggestion that Harry actually learned what was taught him—that is, that the teaching had an effect on him." であり、(7a) よりも (7b) のほうが、Harryのギリシャ語の習得度が高いことが含意されているということになる。また、次のHyde (1999:35) に見られる例を見ることにしよう。

- (8) a. Mary helped John make the tough decision.
b. Mary helped John to make the tough decision.

Hyde (1999) によると、(8a) は、ジョンが厳しい決断をする過程にメアリーが積極的に加わったことを述べている文であり、文主語メアリーの直接的な関与を印象づける文であるという。それに対して、(8b) は、例えば、メアリーがジョンを励まして厳しい決断をさせたような状況を描写する文であり、文主語であるメアリーの間接的な関与を印象づける文であるという。この (8a) と (8b) の違いは、toが介入するかしないかによる。すなわち、toを伴う (8b) では文主語の間接的な関与が表され、toを伴わない (8a) では、文主語の直接的な関与が表されるということになる。Lakoff and Johnson (1980:131) は、(7a) と (7b) 以外にも他の例を挙げて、"Just what the subtle differences are is given by the metaphor CLOSENESS IS STRENGTH OF EFFECT, where CLOSENESS applies to elements of the syntax of the sentence, while STRENGTH OF EFFECT applies to the meaning of the sentence. The CLOSENESS has to do with form, while the STRENGTH OF EFFECT has to do with meaning."

と述べている。実際、これは、Haiman (1981:782) が "The linguistic distance between expressions correspond to the conceptual distance between them." と述べている類像性 (iconicity) の考え方に通じる。つまり、ある言語表現において、ある要素Xと別の要素Yが統語的にお互いに近ければ、その関係は概念上においても互いに近いこと、また、逆に、ある要素Xと別の要素Yが統語的に遠い関係にあれば、その関係は概念上においても遠いと捉えられる、としてよいであろう。そして、例えば、要素Xが動詞の場合であれば、その目的語に相当する要素YがXに近ければ近いほど、Xの影響をより強く受けるということになるであろう。そして、逆に、要素Xと要素Yが遠ければ遠い程、Yに対するXの影響力は弱いということになるであろう。すると、「主語＋主動詞＋to-不定詞補文」のような型の文においては、常に、主動詞が表すイベントと不定詞補文が表すイベントには一定の概念的距離があることになり、空間的・時間的に、常に不定詞補文のイベントは主動詞の表すイベントに後続するのが自然であることになろう。また、Wierzbicka (1988:29) は、to-不定詞補文は、大まかな言い方をすれば、"wanting"、すなわち、「欲求」を含意するとしているが、この説明も、結局は、toが「方向」を表すということにつながるものであるように思われる。なぜなら、ある事柄を「欲求」するということは、まさにその事柄の未来における実現を求めることに他ならず、その意味で、常に未来指向のイメージを伴うからである。Smith and Escobedo (2000) が述べているように、to-不定詞補文が未来指向的な意味を持つ動詞に続く場合、あるentityがある「目標」に向かって「移動」するイメージが喚起され、それが、「主語＋主動詞＋to-不定詞補文」型の文が表す典型的な意味であると考えられる。また、ある物理的な移動を表す表現が、比喩的に拡張されて、物理的な動きを伴わない抽象的な表現として用いられることは周知の事実である。例えば、John went to the shop.やJohn went to feed the dog.のような文、さらに抽象度の高い例として、John intends to go to Paris next spring. やJohn wants to study linguistics in Paris. のような文が存在する。最初の2つの文では、Johnの物理的な移動が述べられているが、後の2つの文では、最早、Johnの物理的な移動は感じられない。しかしながら、Verspoor (1999:511) は、このような物理的な移動が表されていない文に関しても、"We may conclude that the *to* infinitive expresses that the subject, figuratively speaking, moves towards the state of being expressed, is not there yet, but is projected toward it." と述べている。

確かに、Verspoorが述べているように、物理的な移動は表されていないとしても、toの存在により、抽象的な表現においても、「文主語がある目標に向かって移動して行く」イメージが呼び起こされるように思われる。例えば、Smith and Escobedo (2000:555) に、I forgot/ refused to pay the bill.の例が見られるが、この例でも文主語の物理的な移動はないが、toの存在により、「文主語の目標に向かう抽象的な移動」が感じられるように思われる。I forgot to pay the bill. に関しては、説明的な訳をすると「勘定を支払う方向に向かうことを忘れた」ということになるし、I refused to pay the bill. に関しても、「勘定を支払う方向に向かうことを拒んだ」と説明的に訳することができるであろう。

ここで、to-不定詞補文が用いられている文に共通する点について触れておくことにする。それは、「主語＋主動詞＋to-不定詞補文」型の文では、主動詞が表すイベントとto-不定詞補文が表すイベントには空間的・時間的な隔たりがあるということである。したがって、want、desire、craveなどの動詞がto-不定詞補文のみをその直後に許すのは、これらの動詞は発話時点での文主語の「欲求」を表し、to-不定詞補文の表す内容は、必然的に発話時よりも後に生起するわけであり、その意味で、これらの「欲求」を表す動詞類が表すイベントと不定詞補文が表すイベントには常に時間的な隔たりがあるわけである。つまり、toが用いられることで主動詞が表すイベントとto-不定詞補文が表すイベントとの間に概念的な距離 (conceptual distance) が感じられることになるということである。すなわち、主動詞が未来指向的な意味を持つ場合は、それが表すイベントとそれに後続するto-不定詞補文が表すイベントの間には空間的・時間的な隔たりがあることがtoによって表されるということである。

この節で見てきたことを要約してみると、(1)のchoose、expect、hopeのような「未来指向的な意味」を表す動詞類を伴う場合、「主語＋主動詞＋to-不定詞補文」の型の文では、不定詞補文が表すイベントは常に主動詞が表すイベントの後に生起することを表し、一方、get、learn、manageなどの「到達」「達成」の意味を表す動詞類を伴う場合、「主語＋主動詞＋to-不定詞補文」の型の文では、過去時制においてはto-不定詞補文の内容は実現されたイベントを表すことになる。

3. 動名詞補文の特徴

この節では、「主語＋主動詞＋動名詞補文」型の文における動名詞補文の特徴について考察を行うことにする。例えば、Langacker (1991:445) は、後続する要素とし

て動名詞補文を許容する動詞として、(2)に見られる動詞以外に、例えば、experience、love、like、resent、などを挙げ、これらの動詞と後続する動名詞補文との間には「時間的な重なり」(temporal overlap)があると述べている。Smith and Escobedo (2000:556)も、Lan-gackerに従い、例えば、She appreciates and enjoys studying linguistics. のような例を挙げ、主動詞が表すイベントと動名詞補文が表すイベントは同時に起っており、この「同時性」が、動名詞補文の形で具現されると主張している。また、Wirerzbicka (1988:91)も、「主語+主動詞+動名詞補文」型の文において、主動詞が示す時間とそれに続く動名詞補文が示す時間は、同時であると述べている (the 'sameness of time' condition)。しかし、彼女は、急いで次の各例を挙げて、動名詞補文が、主動詞が表すイベントとの同時性ではなく「過去 (の事実)」あるいは「未来 (の可能性)」を表す場合もあるとしている。

- (9) a. I regret [the fact of] quarreling with Mary last year.
b. Hal considered [the possibility of] becoming a karate instructor.

これは、Wierzbicka (1988) が、上の (9a) と (9b) における主動詞regretの時間と動名詞補文の時間にはずれがあると考えていることを示していることになろう。つまり、regretは現在の時間 (発話時) を示しているが、動名詞補文の時間は「過去」に属していると解釈され、また、(9b) においては、動名詞補文の表すイベントは、consideredの示す時間よりも後に生起するとする解釈が可能なのであろう。また、Duffley (2000:228) は動名詞補文は、時間性 (temporality) には無関心であると述べて次の例を挙げている。

- (10) a. I am considering working with him.
b. I am enjoying working with him
c. I remember working with him.

上の例が示すように、(10a) では、動名詞補文が表す時間は、主動詞 considerが表す時間よりも後であると解釈され、(10b) では、主動詞 enjoyと動名詞補文が表す時間は同時であると解釈される。また、(10c) に関しては、動名詞補文の示す時間は主動詞rememberが表す時間に先行すると解釈される。このように、動名詞補文は主動詞が表す時間と同時であるとする解釈だけではなく、その前あるいは後である解釈もできるという柔軟

性があることから、Duffley (2000) は、動名詞補文は「時間性」とは関係がないと主張している。すなわち、動名詞補文が表す時間は、主動詞の持つ意味から論理的に割り出されるものであり、(10a) に見られるように、何かのイベントの実現を考えるとということはまだそのイベントが実現化されていないことを含意するわけであるし、(10b) におけるように、あるイベントが楽しめるのはそれが実現している間である。また、(10c) におけるように、何かの出来事を思い出す行為が成立するためにはその出来事が実際に過去に起っていなければならないわけである。動名詞補文は、しばしば、「現実性」「叙実性」を表すと言われるが、これは、(10c) のように、rememberのような動詞類の場合に限られるのであり、常に主動詞に後続する動名詞補文が「現実性」「叙実性」を表すわけではない。一見、このDuffley (2000) の動名詞補文に関する見解は妥当であるように思われる。しかしながら、Verspoor (1996:439) は、上の (9a) と (9b) のような例に関しても、「同時性」の考えが適用できると主張している。彼女は、(9a) に関しては、"Even though the event took place in the past, the thought or image of the event is simultaneous to the emotion." であると述べている。また、(9b) に関しては、Verspoor (1996:439) は、"The *-ing* symbolizes a directly and immediately perceived event or a conceived imperfective cognitive event in mental space. In other words, it is not the possible futurity of the event, but the simultaneity of the mental event that is grammaticalized." であると説明している。つまり、過去の出来事であれ、未来の可能性についてであれ、ある事柄に対する感情は過去の出来事を思い起こしている時間と同時に発生する、また、未来の事柄について思いめぐらす内容はまさにその内容を思いめぐらす精神活動と同時進行のものであろう。このVerspoorが主張する意味における「主動詞の表すイベントと動名詞補文が表すイベントの同時性」の見解が妥当であるように思われる。そして、Verspoor流に動名詞補文が表すイベントと主動詞が表すイベントが「同時」とする説明が、動名詞補文を伴う文の一般的な特徴であると主張することができるようになる。また、「主語+主動詞+to-不定詞補語文」型の文と「主語+主動詞+動名詞補文」型の文を比較すれば、前者では、toが存在しているために、主動詞が補文に及ぼす影響力は、後者の主動詞が補文に及ぼす影響力よりも弱いということになるであろう。つまり、後者の場合は、主動詞が直接に動名詞補文を支配しているので、動名詞補文への影響力が直接的であるということになろう。このことから、動名詞補文の内容

は文主語が直接それに関与していると考えられる。主語が動名詞補文に直接関与（あるいは、補文内容を直接体験）している例を次に見ることにしよう。次の各例は、文主語の精神活動を表すrememberやimagineなどの動詞や、abhor、enjoy、あるいはregretなどの感情を表す動詞が含まれるが、これらの動詞類は、文主語のみが関与する精神活動であり、第三者からは観察不可能なprivate verbに属するものである(Verspoor 1996:445-6)。

- (11) a. I remember taking out the garbage.
b. I imagined sitting on the beach.
c. I abhor living in the country.
d. I enjoy watching movies.
e. I regret leaving you.

(11a)～(11e)で観察される重要な点は、主動詞の表すイベントと動名詞補文が表すイベントとの同時性に加えて、文主語が動名詞補文が表す内容に直接関与していると考えられるということである。（これは、コントロールの問題とは別の次元の話である。）動詞を大きく二つの種類に分類すると、意図性のある動詞と意図性のない動詞に分類できるであろう。上の (11a)～(11e) の例の中で、abhor、enjoy、またregretは自然発生的な感情を表す動詞であり、rememberもここでは「～を覚えている」の意味を表すので、これらの動詞は意図性を伴わない。しかし、それぞれの動詞を含む例は、文主語の直接的な体験が述べられているところが共通している。一方、(11b) のimagineは、意図性を伴う動詞だが、他の例と同様に、文主語の補文内容への直接的な働きかけが感じられる。したがって、意図性を伴う動詞も意図性を伴わない動詞も共通して、主語の動名詞補文の内容への直接的な関与が認められることになる。つまり、動名詞補文が用いられる場合というのは、文主語が補文のイベントに直接コミットしており、かつまた主動詞の表す時間とそれに後続する補文の表す時間が同時である場合ということになる。なお、意図性を伴う動詞類に関しては、Verspoor (1999:524) の主張が妥当であるように思われる。彼女は、Searle (1983:84) の意図性に関する考え方を採用し、to-不定詞補文が用いられている文においては、文主語のprior intentionが、そして、動名詞補文が用いられている文においては、文主語のintention in actionが表されているとする。具体的には、to-不定詞補文が用いられているということはto以下の内容が前もって意図されたものであるということであり、動名詞補文が用いられている場合というのは意図と行為が同時（あるいはほぼ同時）であることが表されている、というこ

とである。ここで、意図性を伴う動詞を含む例について見ておくことにしよう (Verspoor 1996:437)。

- (12) a. I avoid swimming.
b. *I avoid to swim.
(13) a. *I refuse swimming.
b. I refuse to swim.

(12b) が非文法的である理由は、avoidという動詞は、まず、この動詞の主体がavoidする内容を直接引きおこす（直接関与）ということに加えて、「避ける」という行為と避ける対象（すなわち、泳ぐこと）が、同時でなければ「泳ぐことを避ける」という行為は成立しないからである。それに対して、(13a) が非文法的である理由は、refuseが未来指向的な意味を持っているからに他ならない。つまり、refuseは未来においてあるイベントを生起させないことを意図することを意味する動詞である。したがって、補文の内容に関して、文主語はそれを前もって生起させないという意図 (prior intention) を持っているということになるのでrefuseの後にはto-不定詞補文のみが許されることになる。

この節では、動名詞補文が用いられている文においては、主動詞が表すイベントと動名詞補文が表すイベントが同時であるということ、また、動名詞補文が用いられることにより、文主語の補文内容への直接的な関与が表現されることを見た。実際、主動詞の影響力を動名詞補文が直接受けており、事実上、それが主動詞の直接目的語である名詞句であることを次節で確認することにする。

4. 動名詞補文の機能

Duffley (2000:229) は、「主語＋他動詞＋動名詞補文」型の文に関して、"As direct object of the matrix verb, the *-ing* merely denotes "that which is [verb]ed"..."と主張している。つまり、この型の文における動名詞補文は単なる名詞句に過ぎないということになる。以下で見るように、動名詞補文を含む文 (14) を、(15a) のように受動文にしたり、(15b) のように疑似分裂文にしたり、あるいは、(15c) に見られるように、動名詞補文を代名詞化したりすることが可能である。したがって、playing tennis on the new courts はenjoyの直接目的語に相当する名詞句であると判断することができる。

- (14) Everyone enjoyed playing tennis on the new courts.
(15) a. Playing tennis on the new courts was enjoyed

by everyone.

- b. What everyone enjoyed was playing tennis on the new courts.
- c. Yes, everyone enjoyed it.

動名詞補文は単なる直接目的語であるので、十分予測がつくように、enjoyのような動詞は、純粋な名詞句を許すのも自然であろう。例えば、OALDにはAll of them enjoyed the party. や We thoroughly enjoyed our time in New York. あるいは We enjoyed the game immensely. などの例が見られる。動名詞補文が表すイベントの時間は、たとえそれが主動詞が表す時間から見て、論理的に過去、同時、あるいは未来に相当すると解釈できるにせよ、あくまでも主動詞が表すイベントと動名詞補文が表すイベントは同時であることはすでに上で見た。enjoyのような動詞は、楽しむ内容と楽しむという心理状態とを切り離すことのできないものであり、主動詞のイベントと動名詞補文が表すイベントが同時に進行するという解釈しか許さない。さらに、enjoyの直接目的語に当る動名詞補文の内容を直接体験するのは文主語である。したがって、enjoyはその後続要素として、もっぱら動名詞補文のみが選択されることになるわけである。

この節では、Duffley (2000, 2003) が、動名詞補文の機能は主動詞の直接目的語に相当する名詞句であるとする主張が妥当であることを見た。

5. 同じ動詞がto-不定詞補文と動名詞補文の両方を許す場合

動詞intendがその後続要素としてto-不定詞補文と動名詞補文の両方を許している例を見ることにしよう。

- (16) a. He intends to leave at six.
 - b. He intends leaving at six.
- (Huddleston and Pullum 2002:1225)

Huddleston and Pullum (2002) によると、(16a) と (16b) は、同じ意味を表すという。また、Palmer (1974:174) も、次の各例には、意味的にほとんどあるいは全く違いはないと述べている。

- (17) a. I plan to go there.
- b. I plan going there.

上の (16) と (17) は、to-不定詞補文と動名詞補文との違いがほとんどあるいは全く感じられない例として扱われているが、これまでの考察に基づいてそれぞれの例を

分析してみると、次のようなことが主張できるであろう。すなわち、to-不定詞補文が用いられている (16a) と (17a) では、文主語は、prior intentionを持ち、補文の内容は未来時に属するものと捉えている。一方、(16b) と (17b) では、文主語は、intention in action を持っており、すでに動名詞補文が表す内容にコミットしている感じがあるように思われる。つまり、(16a) は、He will leave at six. あるいは、He is going to leave at six. に、また、(17a) は、I will go there. あるいは I am going to go there. に意味的に近く、(16b) は、He is leaving at six. また、(17b) は、I am going there. にそれぞれ意味的に近いということが言えるのではないかということである。

最後に、to-不定詞補文が使用されると文主語が補文が表すイベントへ移動あるいは到達することが表され、一方、動名詞補文が使用されるとその内容は名詞句に相当するものであることを、次のHuddleston and Pullum (2002:1243) が挙げている例で確認しておくことにしよう。

- (18) a. They fear to go out at night.
- b. They fear going out at night.
- (19) a. He scorns to compromise.
- b. He scorns compromising.

(18a) は「彼らは、夜に外出することを恐れている」ことを意味するが、to以下の方向に向かうことを恐れているわけであるから、They don't/won't go outを含意する。一方、(18b) にはそのような意味はなく、動名詞補文は、直接目的語である名詞句に相当する (eg. They fear an attack.)。同様に、(19a) は、He doesn't / won't compromise. を含意するが、(19b)では、compromising が直接目的語である名詞句に相当し、He scorns compromise. の意味に近いことになる。

6. 終わりに

本稿では、Lakoff and Johnson(1980)のCLOSENESS IS STRENGTH OF EFFECTの比喩的概念とHaiman (1981) のiconicityの概念を適用しながら、主動詞の意味特性を考慮することによって、それに後続する要素としてto-不定詞補文あるいは動名詞補文のいずれが選択されるか予想がたつことを見た。主動詞の後にto-不定詞補文が後く場合、主動詞が表すイベントとto-不定詞補文が表すイベントには空間的・時間的な距離があることが象徴される。また、toは「方向」と「到達」の両方の意味を持つので、主動詞が未来指向的な意味を持つ場合、

to-不定詞補文の内容はまだ現実化されていないイベントに言及することになり、一方、主動詞の意味が「到達」「達成」の意味を持つ場合は、toは「到達」の意味を持つことになり、to-不定詞補文は、「実現されたイベント」を表すことになる。また、Searle (1983) が唱えるprior intentionの考え方がto-不定詞補文が使われる理由の説明に適用することができると考えられる。一方、動名詞補文については、その特性として、確かに、「事実性」「叙実性」を表す事例は多数存在するが、例えば、上で見たように、considerのような動詞に後続する補文内容は「未来の可能性」を表しており、「事実」に言及するものではない。動名詞補文は上で見たように、統語上、主動詞に隣接しており、直接目的語の役割を果たす名詞句である。直接目的語であるがゆえに文字どおり動詞の影響を直接受ける対象として扱われる。したがって、文主語による補文内容への直接の関与が含意されることになる。また、上で見たように、動名詞補文が選択される理由として、主動詞が表すイベントとそれに後続する動名詞補文が表すイベントが同時的であるとするVerspoor流の考えが有効であることを見た。そして、主動詞が表すイベントと動名詞補文が表すイベントが時間的に同時であるという概念が、統語上、そのまま主動詞と動名詞補文が隣接した形で具現されるものと思われる。また、主動詞が意図性を持つ動詞の場合、Searle (1983) が唱えるintention in actionの考え方を動名詞補文を持つ文に適用することができるように思われる。

結論的には、言うまでもなく、主動詞そのものが持つ意味特性が、その後続要素としてto-不定詞補文あるいは動名詞補文の選択決定の鍵になるということになるであろう。

注

- 1 to-不定詞補文が直接目的語として機能している例は少ないかも知れないが、次のような例が存在する。
'Do you like to travel, Sophia?' 'I adore it.'
(S.Sheldon, Morning, Noon & Night.)
- 2 もちろん、前置詞toに動名詞が後続する例も多く存在する。例えば、次のCurme (1931:493) が挙げているペアについては、(i)では、toは前置詞で、to以下は動名詞補文であり、ゆえにそれは名詞句であるが、(ii)におけるtoは不定詞のmarkerであり、to以下は名詞句ではないという違いが存在する。なぜなら、(iii)のやりとりが自然なのはto以下の動名詞は補文の名詞的な性質によるが、(iv)のやりとりが非文法的であるのはto不定詞補文が名詞的ではないことによる (Rudanko

1996:59)。

- (i) I am accustomed to doing it this way.
- (ii) I am accustomed to do it this way.
- (iii) Q. What am I accustomed to?
A. Doing it this way.
- (iv) Q. What am I accustomed to?
A. *Do it this way.

また、Rudanko (1996:62) は、次の例を挙げて、to-不定詞補文が用いられている (ii) のほうが文主語が補文が表すイベントにより直接的に関わっており、一方、動名詞補文が用いられている (v) の方は、文主語と補文が表すイベントとの間により距離が感じられるという。

- (v) The cabinet agreed to revising the bill.
- (vi) The cabinet agreed to revise the bill.

実際、コントローラーに関して、(v) では、to以下の内容を行なうのは、the cabinet以外の解釈を許すが、(vi) では、コントローラーは文主語のみの解釈となる。

参考文献

- 安藤貞夫. 2005. 『現代英文法講義』東京: 開拓社.
- Curme, G.O. 1935. *Syntax*, Heath. Rpt. 東京: 丸善, 1959.
- Declerck, R.A. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo: Kaitakusha.
- Dixon, R.M.W. 1984. "The Semantic Basis of Syntactic Properties." *Berkeley Linguistics Society* 10, 583-93.
- Duffley, P.J. 2000. "Gerund versus Infinitive as Complement of Transitive Verbs in English," *Journal of English Linguistics* 28, 221-248.
- Duffley, P.J. 2003. "The Gerund and the to-Infinitive as Subject," *Journal of English Linguistics* 31, 324-352.
- Haiman, J. 1983. "Iconic and Economic Motivation." *Language* 59, 781-819.
- Huddleston, R. and G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hyde, B. 1999. "The Structure of the to-infinitive." *Lingua* 110, 27-58.
- Lakoff, G and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Langacker, R. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*. Vol.2: *Descriptive Application*., Stanford: Stanford University Press.
- Palmer, F.R. 1974. *The English Verb*. London: Longman.

- Quirk, R and Greenbaum. 1973. *A University Grammar of English*. London: Longman.
- Quirk, R., S, Greenbaum,., G, Leech. & J Svartvik, 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rudanko, J. 1996. *Prepositions And Complement Clauses*, New York: State University of New York Press.
- Searle, J.R. 1983. *Intentionality*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, M.B. and J. Escobedo. 2001. "The Semantics of *to-infinitival* vs. *-ing verb complement construction* in English," *Chicago Linguistic Society* 37, 549- 563.
- Verspoor, M. 1996. "The story of -ing: A subjective perspective." In Putz, M & R. Dirven eds., *The Construal of Space in Language and Thought*., Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Verspoor, M. 1999. "To infinitives." In Stadler, L and Eyrych, C eds. *Issues in Cognitive Linguistics* 12, 505-526.
- Wierzbicka, A. 1988. *The Semantics of Grammar*, Amsterdam/Philadelphia John Benjamin.
- 八木克正. 2006. 『英和辞典の研究』東京: 開拓社.

辞書

- Oxford Advanced Learner's Dictionary. 7th edition.
2005. Oxford: Oxford University Press
(平成20年9月17日受付)